

近現代の四国遍路研究によせて

上野 進（香川県政策部文化芸術局文化振興課主任）

Comments on research about the Shikoku Henro in modern and contemporary times

Susumu Ueno

Supervisor, Culture Promotion Division, Kagawa Prefecture Government

2015年10月18日、愛媛大学で開催された研究集会「近現代の四国遍路」では、4名の研究者から多彩な報告を聞くことができたが、ここでは報告ごとにコメントすることとしたい。私の専門は中世の寺院史であるが、現在は香川県庁で四国遍路の世界遺産登録に向けた取組みに従事している。最初に、四国遍路の世界遺産登録に向けての現在の動きについて一言説明しておけば、資産の保護をいかに図ってゆくかという課題があるといつてよい。資産とは遍路道と札所霊場ということだが、保護すべきそれらをいかに評価し、位置づけてゆくかということ—このことを検討するうえで、やはり近現代の問題を避けることはできないと考えている。本来、私は近現代史については門外漢であるが、日頃から遍路道や札所霊場の近現代史の必要性を感じているものとして、以下、不十分ではあるが、コメントしてゆきたい。

まず、稲田道彦氏「四国徧禮道指南」における聖地の景観から始めたい。稲田報告は、四国遍路の出発点ともいえる真念の「四国徧禮道指南」の検討から、その参拝場所を丁寧におさえ、それによって具体的な「場」を提示している。四国遍路の、いわゆる聖地に対するイメージ、聖地観は、研究者によってもかなり異なるのが現状であり、それをいったん史料に立ち返って具体的に分析を加えたところに本報告の意義があると考えている。重要なのは、稲田報告が「札所＝聖地」という見方を相対化する視点を含んでいることである。真念は、札所を含めたあらゆる場所に聖地性を見出しているようにもみえるわけで、おそらく稲田氏は、四国遍路にとっては巡礼する行為そのものが大切であり、真念にとってどこを巡るかという点は現代人ほど強くなかったと考えているのではないか。つまり巡礼行為そのものを第一義とし、多くの聖地を巡ること自体が重要だという認識に立っているのではないかということである。こうした認識は、四国遍路の本質を考える上できわめて重要であり、こうした認識が今もなお根底で生きてみるとみるのかどうかは、近現代の四国遍路を評価する上でも避けられない問題といえるだろう。

ただし、このような聖地観はやや静態的ではないかという印象もうける。例えば札所と聖地との関わりという点からいえば、興味深いのは第73番札所の出釈迦寺の事例である。というのは、成立当初の札所は修行的性格を色濃くもっており、山頂や山中に設けられることが多かったとみてよいが、それでは札を納めるのに不便であるため、その麓に新たに札所がつくられるようになる。つまり札所寺院側が、境内に聖地を引き込む形をとっており、そこでは空間的な一体化が行われているといえる。これは秩父霊場の札所でもみられるもので（岩本馨氏「札所」『寺社をささえる人びと』吉川弘文館、2007年）、札所霊場の成立・展開の一つのコースと考えられる。札所霊場が聖地として整備された、ということもできるだろう。また、近世以降、大師堂がなかった札所霊場においてもしだいに大師堂が建てられていったことも、札所霊場が聖地として整備されていった事例としてあげることができる。つまり大衆化時代に見合う聖地として札所が成立しているということであり、このような聖地の問題については最後に、まとめにかえてもう少し触れてみたい。

次に、小幡尚氏「戦争と四国霊場・遍路—高知の事例—」であるが、小幡報告は、近代の四国遍路に関する研究が少ない中、近代とりわけ日清・日露戦争期における札所寺院の実態を具体的に明らかにしている。従来の研究では遍路者が分析対象とされることが多かったが、この報告では札所寺院の動向に光があてられ、とりわけ高知県の廃仏毀釈後の状況に関わる史料の提示等は、今後の研究にも資するところが大きいと考える。戦勝祈願の問題や戦没者慰霊の問題などによって近代の寺院の活動を具体的に示すとともに、報告では映像なども交えながら、境内をとりまく空間が一定程度変容していったことを明らかにした。ただし、それぞれの評価が難しいというのも事実であろう。例えば忠魂墓地の存在などが寺にとってどの程度、ウェイトがあるのかは判断が難しいといえる。また、報告後に出されていた質問として「四国霊場になぜ墓をつくったりとするのか」というものがあつたが、それはもともと寺—檀家といった地域社会との関係性があつたとも考えられる。つまり札所寺院は札所の側面だけに解消できないわけで、札所寺院をとりまく諸関係、とりわけ地

域との関係などを含めた総合的な解明が必要であるといえよう。地域との関係性が薄れる側面がある一方、墓や位牌によって地域との連関が維持される側面もある—その両面をみる必要があるのではないか。小幡報告は札所寺院の存立基盤等を考えてゆく一つの契機を与えるものといえるが、今後は、近代の通夜堂など札所寺院固有の問題にも幅を広げて、また寺院所蔵史料も含めて、研究を継続していただきたい。

次に、中川未来氏「植民地台湾の四国八十八ヶ所写し霊場」である。写し霊場の研究は本四国とは別に、四国遍路習俗の広がりを考える上で日本の巡礼研究にとって重要なものであるが、とりわけ海外の事例研究は少なく、中川報告は植民地台湾の2つの写し霊場を丁寧に検討したものであり、貴重な成果といえる。台北新四国では、1923年の発願の際、台湾の「皇化」に弘法大師が出てきていることも重要である。森正人氏の研究（『四国遍路の近現代』創元社、2005年）によれば、大阪朝日新聞社が「弘法大師文化宣揚会」を結成して弘法大師に関わる事業を展開しようとしたのが1934年のことで、台北新四国の場合はそれよりも先行しているということ—マス・メディアによる弘法大師事業よりも、弘法寺のようなところでその有力信徒が「写し霊場」設置の中で、弘法大師を国家的イデオロギー形成に使ったということが知られるわけである。また、写し霊場は庶民信仰の一つの潮流といえるが、教団仏教との関わりの中で写し霊場が成立しているとすれば、単純な庶民信仰とはいえないのかもしれない。この点、今回の写し霊場の事例を一般的な写し霊場研究の中に入れ、吟味する必要もあるのではないかと感じた。

中川報告で出された史料で特に目を引くのは、宮地氏の巡礼記である。報告では時間の関係のためか、この史料にふみこんで言及されていなかったが、具体的な巡礼風景、すなわち代参や接待、巡礼姿などがうかがえる興味深いものである。つまりこの場合は霊場のみならず、四国遍路習俗そのものが移植されていたという事実を私たちに示しているといえよう。

最後の青木亮人氏「文学や漫画から見る近現代の遍路」であるが、青木報告は四国遍路を題材とした代表的な文学作品や漫画作品を取り上げ、それぞれの作品と四国遍路との関係、あるいは背景となる時代等について検討したもので、さまざまな作品が話題にのぼっていたが、私には教えられることが多い、新鮮な印象を与える報告であった。それはおそらく私一人の感想というよりは、四国遍路の歴史研究者全体にいえるのではないと思う。つまり歴史研究者が分析対象とすることが多い四国遍路関係の著名な作品であればあるほど、案外、作品の全体像や文学史的な意義等の検討は必ずしも十分ではなかったのではないかということである。例えば高群逸枝の『娘巡礼記』は代表的な巡礼記・紀行文の一つで、私も好きな作品であるが、青木報告が指摘する「札所中心に記述されている」ことはあまり意識していなかった。つまり札所の描写自体は、この時期の札所の実態を知る上で貴重な情報といえるが、そもそも点である札所を中心に描き、線である道についてあまり描いていないとすれば、このことをどのように解釈するのが問題となってくる。点を重視し、かつ線を省略する遍路—このことを考えることは、近現代の四国遍路を評価する上でも重要な意味をもって来るだろう。ただし、この作品が新聞連載を前提とした手記であったということも関係しているのかもしれない。

また、これまであまり取り上げられていなかったようであるが、近代の四国遍路を考える上では季語としての「遍路」の成立の問題も重要である。青木報告によれば、「遍路」が季語となるのは大正に入ってからで、昭和に定着したのではないかということであるが、このことは文学側の問題か、あるいは当時の社会の問題かなど慎重な検討が必要とはいえ、青木報告では愛媛・俳句・遍路というキーワードから、高浜虚子の存在がクローズアップされ、再評価すべきことが提言されていた。注目すべき提言だと思う。ただし同時に、光と影の両面がある遍路の、影の側面がやや薄くなってゆくという時代性、この時期固有の問題も関連するのかもしれない。

この他、有名作家ならば問題ないが、無名作家の遍路に関する俳句をどう扱うか、ということも話題にのぼっていた。つまり史料化の問題である。庶民信仰的な性格が強い四国遍路を研究するにあたっては、研究対象をどこまで広げるかということであり、このことは避けて通れない問題だと感じられた。

さて、最初の稲田報告で取り上げた聖地の問題についても述べておきたい。広い意味で巡礼は、メッカ巡礼のように直線型の巡礼と、四国遍路のように回遊型の巡礼とに分けられるが、両者では聖地観は異なるようにみえる。つまり前者の場合、往復型や目的地型の巡礼ともよばれるように、基本的に絶対的な聖地をめざす巡礼といえる。しかし後者の場合、最終的な目的地はどこになるのだろうか。四国遍路でいえば、第88番札所の大窪寺は結願の寺であっても、本来はそこが最終目的地かといえ、そうではないだろう。こ

こには絶対的な聖地がないように見える。すでに民俗学では、日本の巡礼民俗が「聖地への旅」というよりは、「聖なる旅」だという見解も提出されており（中山和久氏「民俗学から見た日本の寺社参詣文化」『寺社参詣と庶民文化』岩田書院、2009年）、参考となる。

ただし、近代になって交通手段が多様化すると、歩かない遍路が登場してくる。道を歩かないということ—これを札所霊場の側にひきつけていけば、「道と切り離された札所」が成立してくる、ということである。このことは、本来もっていた「札所以外の拜所」の意味を変化させてしまうものだったといえる。「札所＝聖地」観の定着にも影響を与えているといえるかもしれない。そこでは遍路の体験の質が変化するとともに、札所霊場の意味も変化していったといえるだろう。とはいえ、こうした変化が、四国遍路における絶対的な聖地形成につながるものであったかといえ、そうではなかったという点も指摘しておきたい。

2015年度 愛媛大学法文学部附属 四国遍路・世界の巡礼研究センター 国際シンポジウム・研究集会

国際シンポジウム

10月17日（土） 13:30～16:30 愛媛大学南加記念ホール

挨拶 仁科 弘重（愛媛大学理事・副学長）

西村 勝志（愛媛大学法文学部長）

寺内 浩（愛媛大学法文学部附属四国遍路・世界の巡礼研究センター長）

Holy Week Pilgrimages in the Roman Catholic Philippines

（フィリピンのローマカトリック教徒による聖週間の巡礼）

ジュリウス・パウティスタ（京都大学東南アジア研究所准教授）

通訳 菅谷成子（愛媛大学法文学部教授）

世界の視点から見た四国遍路の魅力—西洋人遍路を例として—

モートン常慈（徳島文理大学保健福祉学部講師）

研究集会「近現代の四国遍路」

10月18日（日） 9:00～16:00 愛媛大学法文学部大会議室

「四国徧禮道指南」における聖地の景観

稲田道彦（香川大学経済学部教授）

戦争と四国霊場・遍路—高知の事例—

小幡 尚（高知大学教育研究部教授）

植民地台湾の四国八十八ヶ所写し霊場

中川未来（愛媛大学法文学部講師）

文学や漫画から見る近現代の遍路

青木亮人（愛媛大学教育学部准教授）

コメント

上野 進（香川県政策部文化芸術局文化振興課主任）

主催 愛媛大学法文学部附属 四国遍路・世界の巡礼研究センター

共催 愛媛大学人文学会